

(4) 分析を踏まえた指導の改善

意識調査の結果から、一人一人の児童生徒に確かな学力の定着を図るために以下の内容を大切にしたい指導が望まれる。

① 学ぶことの意義や目的についての意識を基盤にした「学ぶ意欲」を高めるための工夫改善

設問2で、9割程度の児童生徒は勉強は大切だという意識をもっている。設問3で、8割強の児童生徒は努力して勉強しなければいけないととらえている。さらに、設問4で、8割の児童及び7割の生徒は自分から進んで勉強しようとする意欲をもっている。このように、児童生徒は、全体的に勉強に対して前向きな受け止め方をしている。

一方、設問5で、児童生徒の勉強に対する意義や目的意識を見ると、6割以上の児童生徒が「新しい知識等を学ぶため」「将来の夢をかなえるため」「世の中の役に立つため」ととらえているものの、「将来の夢をかなえるため」といった将来の自身の職業に関する自己実現は学年進行とともに増加するのに対して、「世の中の役に立つため」といった社会的な自己実現については、学年進行とともに減少する傾向にある。また、中学生になると目前に迫る「受験に合格するため」が急増し、7割以上を占めているのも特徴的である。

こうした現状を踏まえると、児童生徒の発達段階に応じて、多様な観点から、学ぶことの意義や目的意識について、深く見つめることができるような体験的な活動を、全教育活動の中で意図的・計画的に位置付けていくことが必要である。児童生徒の学ぶことの意義や目的についての意識を基盤にした「学ぶ意欲」を高め、分からない、できないときにこそ、努力して勉強に立ち向かう力を生み出していくことが望まれる。特に、学ぶことの意義や目的を「社会的な存在としての責任を果たすため」という視点から、実践的に理解を図っていくことができるよう工夫することが重要である。

また、各教科等の学習において、児童生徒の学ぶ意欲を高めるためには、体験的な学習や仲間同士の学び合いを大切にするとともに、実生活と関連付けた学習内容等の工夫をすることが必要である。

② 自ら問題を解決していく「主体的な学習」を生み出すための工夫改善

設問1で、「勉強が好き・どちらかといえば好き」と回答した児童は5割程度、生徒は2～3割程度である。「なぜ、勉強が好きか、好きではないか」の記述をみると、「勉強が分かる・できる」と勉強が好きになる傾向にあることが読み取れる。

一方、設問6では、「授業が分かる・だいたい分かる」児童は7割、生徒が5割程度という結果であり、昨年度よりわずかではあるが上昇している。

こうした現状を踏まえると、今後も引き続き、児童生徒一人一人が分かる授業を展開し、学ぶ意欲を喚起することを最優先課題として取り組むことが必要である。そのために、児童生徒一人一人の学習状況を学習状況調査等からの確に把握・分析し、個の学習状況に応じたきめ細かな指導を行うことで、一人一人にとってより分かりやすく、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図る指導を継続する必要がある。また、学習の

主体者である児童生徒が、自ら課題を見つけ、身に付けた知識や学び方を駆使して主体的に問題解決に取り組み、自らの努力と仲間との練り合いや教師からの助言により「分かった！できた！」と実感をもって理解することができる工夫のある授業づくりが不可欠である。

特に、設問6の授業が分かる割合が、小学校から中学校へ進級すると、大きく減少する傾向について、昨年度と比較して改善の兆しが見られるものの、一層丁寧な指導が求められている。中学校では、自分で学習することがより求められるため、学習の仕方はもちろん、選択教科や進路選択について、さらに、学校生活への適応や人間関係の在り方等についてのガイダンスを適切に行い、生徒の主体的な取組の契機とするとともに、自らの行動に責任をもち、自己を積極的に生かそうとしているかの見届けと日常的な教育相談の充実が重要である。

また、設問7では、授業の中で分からないことがあった場合について、6割以上の児童生徒が「友達にたずねる」とし、次いで「家の人や塾の先生にたずねる」が5割程度であり、「自分で調べる」「先生にたずねる」が3～4割程度である。児童生徒は、身近な友だちとの学び合いを最優先に考えており、互いに信頼し支え合って生活できる人間関係の中で、学びを深めることができるような学級経営が大切である。同時に、教師は、児童生徒との好ましい人間関係を築くよう、日常的に児童生徒の思いを受け止め、わずかな伸びや成長をとらえて認め励ますとともに、具体的で分かりやすいアドバイスに努めることが大切である。

③ じっくり考え、計画的に学んでいく「学習習慣」を身に付けるための工夫改善

設問8の学校外での家庭学習の習慣化については、学習塾や家庭教師を含まない場合と、含む場合では、大きな違いが見られる。3時間以上の家庭学習を見ると、学習塾等を含まない場合は、児童生徒ともに3%弱であるのに対して、学習塾等を含む場合は、児童で5倍程度、生徒で10倍程度に増加する。同様に2時間以上の家庭学習についても、学習塾等を含まない場合に比べ、含む場合は、児童生徒ともに3倍程度に増加している。このことから、学習塾や家庭教師による学校外での学習が位置付けられていることが分かる。

一方、家庭学習の習慣が十分でない児童生徒は、学年進行とともに増加する傾向にある。

また、設問9で、計画を立てて家庭学習をしているのは、児童で5割強、生徒で3割程度とやや低く、家庭学習において「何を、どのように」主体的に進めていけばよいのかがはっきりしていないことが考えられる。このことは、家庭学習の習慣が十分でない児童生徒への指導の手だてが必要であることを示している。

こうした状況を踏まえると、発達段階に応じた計画的・継続的な宿題等の出し方の工夫や、宿題を通して、児童生徒自身が学習効果を感じ、満足感が得られるような内容の工夫、さらに、計画的に努力したことが認められる場の設定等、意図的に行う必要がある。

また、毎日の分かる授業の延長線上に家庭学習の在り方を考え、各教科等の補充・発展的な学習とのかかわりをもたせながら、「自分にもできそうだ!」「こんなことは

どうなんだろう！」といった内発的な意欲を駆り立て、受身的な学習から主体的な学習へと導くような工夫が必要である。

一方、じっくり考え表現する力を身に付けていく上で大切である読書習慣については、設問 10 で、3割程度の児童生徒は1日30分以上の読書の習慣があるのに対して、ほとんど読書しない児童生徒も3～4割いる。今後は、低学年からの読書活動を推進し、読書をするのが表現力を高めたり、自分の生き方に役立つことを実感できる指導をしていく必要がある。一方、ほとんど読書をしていない児童生徒に対しては、一人一人の興味・関心に応じて本を紹介したり、学級で朝読書等の取組を行ったりすることで、徐々に読書量を増やしていくことが有効である。また、学校での読書週間等の行事をきっかけにし、家庭や地域との連携を図るなどして、家族そろって本を手取る機会を計画的に位置付けていくことなどにも取組みたい。